

目録所在情報サービスを対象とする講習会等に関する
検討ワーキング・グループ
中間報告書

平成 18 年 3 月

目録所在情報サービスを対象とする講習会等に関する
検討ワーキング・グループ

はじめに

「国公私大学図書館協力委員会常任幹事館と国立情報学研究所（NII）との業務連絡会」の下に設置された「書誌ユーティリティ課題検討プロジェクト」の最終報告（以下、「プロジェクト報告」という。）において、書誌ユーティリティの根幹をなす総合目録データベースの品質劣化の要因が明らかにされた。すなわち、各参加館における目録業務の実施体制が大きく変化していること、その結果、目録担当者のスキルが全般的に低下していることが指摘され、その問題を解決するために、現在 NII が実施している目録システム関連の講習会・研修の見直しと強化の必要性及び具体的方策を検討するための参加館と NII との合同検討組織の設置が提言された。その提言を受け、平成 17 年 12 月に NII の図書館情報委員会の下に、活動期間を平成 17 年度～18 年度とする「目録所在情報サービスを対象とする講習会等に関する検討ワーキング・グループ」（以下「WG」という。）が設置された。

WG では、先ず上記「プロジェクト報告」等の資料と現在の NII における講習会・研修について受講者や講師の意見等について詳細な検討を行い、問題点・課題の抽出を行った。その中で確認できたことは、問題点・課題を改めて確認することの必要性、各参加図書館における目録業務実施体制が大きく変化したことを踏まえての方策が必要であること、目録担当者のスキルアップが以前にも増して重要なこと等、であった。その上で、平成 17 年度は、大きくわけて 2 つの作業を実施した。

ひとつは、平成 18 年度実施の講習会に取り入れるべき改善点の検討である。これは、WG の設置期間が実質的に 1 年 3 ヶ月であり、その間に有効な方策を示すためには、何らかの改善策を試行する必要があると考えられたからである。具体的には、目録システム講習会内容の理解度を確保するための方法として到達度確認テスト（仮称）の導入及び今後積極的な導入が図られるべきであると考えられる e-Learning のプロトタイプの構築である。できれば平成 18 年度の目録システム講習会（図書コース）において試行したいと考えている。

もうひとつは、目録業務を取り巻く環境変化に対応するための講習会等の枠組みとして、平成 18 年度に何を検討するかについてであり、以下の 5 つの事項を対象とした。

- 1) 海外書誌ユーティリティとの比較
- 2) e-Learning の活用
- 3) 地域活動との連携
- 4) 資格認定制度
- 5) 目録担当者のコンピテンシー

中間報告書では、これらの事項について WG の考え方の方向性を示した。今後国公立大学図書館協力委員会や NII ウェブサイトでの公開等を通して広く意見を伺うことにしており、それを WG での議論にフィードバックさせてさらに検討を進める予定である。

なお、本 WG の設置にあたって特筆すべき点として、はじめて公募による WG メンバーの募集を行ったことが挙げられる。その結果として、NACSIS-CAT/ILL について高い問題意識をもつ業務担当者をメンバーに加えることができたことにもふれておきたい。

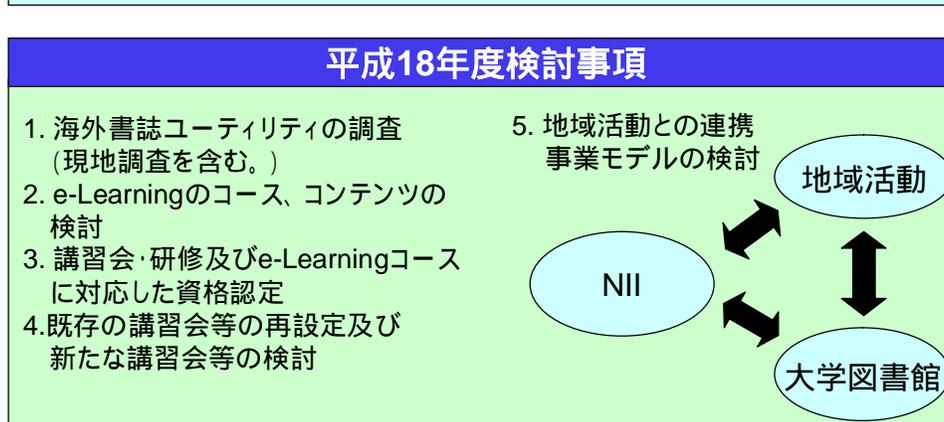
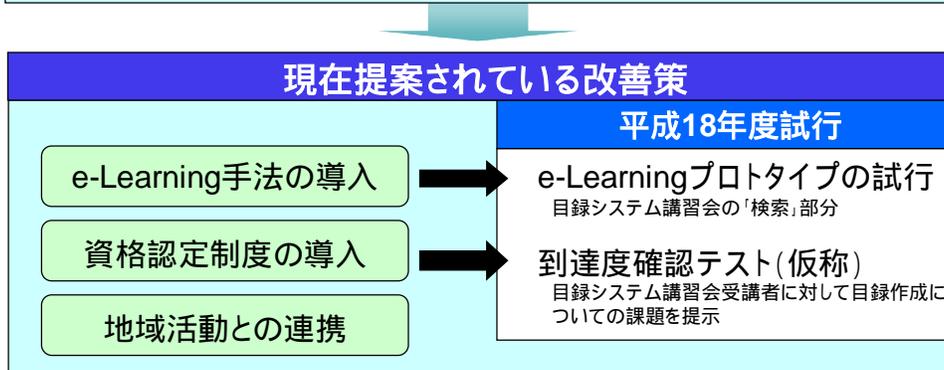
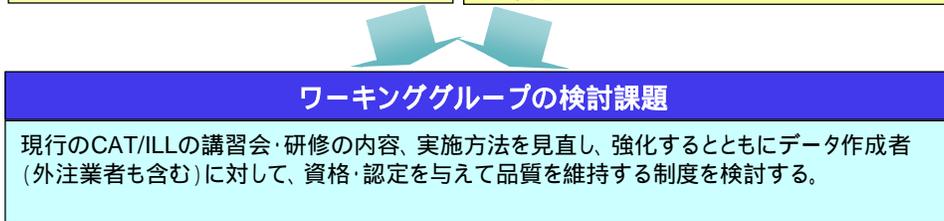
平成 18 年 3 月

目 次

1. ワーキング・グループの目的（対象）	1
2. 議論の経緯	
2.1 問題点の把握	1
2.2 平成 18 年度目録システム講習会に向けた対応策の検討	2
2.3 目録業務を取り巻く環境変化に適応した講習会等の枠組みについての検討	2
3. 目録所在情報サービスを対象とする講習会等の問題点と対応策	
3.1 目録システム講習会（図書コース）	2
3.2 目録システム講習会（雑誌コース）	3
3.3 ILL システム講習会	5
3.4 総合目録データベース実務研修	7
4. 平成 18 年度検討事項	
4.1 海外書誌ユーティリティとの比較	8
4.2 e-Learning の導入に向けて	8
4.3 地域活動との連携について	11
4.4 資格認定制度について	11
4.5 目録担当者のコンピテンシー	13
5. まとめと今後の検討課題	14
参考資料	
1. ワーキング・グループの活動	
1.1 メンバー	17
1.2 審議の経緯	17
2. インストラクショナル・デザインの手法の導入	18
3. 目録システム講習会（図書コース）到達度確認テスト（仮称）実施案	23
4. e-Learning プロトタイプ（検索コース）	24
5. 参考文献	27

目録所在情報サービスを対象とする講習会等に関する 検討ワーキンググループの活動概要

NACSIS-CAT/ILLの課題	講習会等に関わる問題点
総合目録データベースの品質低下 ・重複書誌レコードの増加 ・雑誌所蔵データの未更新 目録担当者、相互利用担当者のスキルの低下	目録作成者の多様化(非常勤職員・外注業者、派遣職員など) 受講者の目録に関する知識・スキル・理解度の低下 集合形式の講習会・研修の限界(受講者数、開催回数、開催場所) 受講者に対する講習後のフォローアップの不足



1. WGの目的（対象）

本WGの目的は、現行のNACSIS-CAT/ILLの講習会・研修の内容と実施方法の見直し・強化をするとともに、データ作成者（外注業者等も含む）に対して資格・認定を与えて品質を維持する制度の検討を行うことである。ただし、後述するように現状は講習会・研修の実施方法や内容を見直しだけでなく、より広い文脈を考慮に入れる必要があるため、新しい手法や枠組についても検討対象とすることとした。

2. 議論の経緯

2.1 問題点の把握

「プロジェクト報告」では、NACSIS-CAT/ILLの理念衰退の現れのひとつとして、図書書誌レコードの重複率の上昇による総合目録データベースの品質劣化が指摘された。本WGの作業は、まずこれらの背景となった問題点・実態を確認することからはじめた。NACSIS-CAT/ILL講習会・研修会の見直しをするためには、実情がどうであるかを正確に知ることが不可欠であるからである。

1) 図書書誌レコード重複率の上昇ということについて

平成15年度にNIIは、NACSIS-CAT/ILLサービスを開始してからはじめて図書書誌レコードの重複について体系的な調査を実施した。すなわち、和書書誌レコード200万件について名寄せシステムを使った「重複可能性のある書誌」グループのリストアップを行い、それをさらにスタッフが目視チェックをして、約7,700件の重複書誌を抽出した。この件数は調査対象とした書誌レコード件数200万件の0.4%にあたり、数字としては必ずしも大きいものとは考えられない。しかし、さらに詳細な調査の結果、7,700件のほぼ4分の1にあたる22%が同じISBNをもち、目視でも同一書誌であることが確認された。

平成16年度と17年度（2005年12月まで）に統合削除された重複の図書書誌レコード（和洋）の件数をみると、いずれも当該年度作成書誌件数の0.6%であり、重複率は必ずしも上昇しているとはいえない。問題があるとすれば、重複レコードの4分の1が、全く同じ内容の書誌であったことである。

2) 目録担当者のスキルについて

「プロジェクト報告」では、図書書誌レコードの重複の要因のひとつとして、各大学の目録担当者のスキルの低下が挙げられている。たしかに目録担当者のスキルの低下は認められ、その要因としては、各図書館において目録業務の効率化、合理化が進み、非常勤職員や外注業者への委託が拡大したこと、NACSIS-CAT/ILLへの小規模図書館の参加拡大に伴い、目録業務体制の弱い図書館が増加したこと等が考えられる。しかし、重複レコード発生の要因が目録担当者だけにあるかどうかについては、検討する余地があると思われる。後述するように、現在の目録システム講習会・研修は現場の要望や要請に対応できていない面があり、目録担当者に対するサポート体制の整備やシステム上でさらに対応可能な部分があるのではないと思われる。目録データベースの品質管理は、効率的な業務処理やよりよい利用者サービスを実現していくためのものであり、当WGとしては、そのような観点に立って、講習会等の見直しと強化の具体的方策を検討する。WGの検討対象外の課題については、提言のかたちでまとめることにしたい。

他に、雑誌所蔵データの未更新やILL謝絶率の問題がある。これらについては平成18

年度の検討になるが、同様に問題点の正確な把握が必要であると考えている。

2.2 平成 18 年度目録システム講習会に向けた対応策の検討

本WGの活動は12月から開始されたところであるが、本年度の活動成果として平成18年度から目録システム講習会に取り込むことのできる事項を検討した。第4章での分析に基づき、カリキュラムの変更と到達度確認テスト（仮称）の実施について検討した。カリキュラムについては、時間的にも平成18年度から変更することは難しいと判断し、原則的に変更は行わないこととした。

到達度確認テスト（仮称）は、講習受講後に、習得すべき内容を理解しているかを診断するテストである。登録作業を伴うテスト（実技方式）の他に受講者が各講のポイントを確認するテスト（客観方式）を行う。受講のモチベーション向上と、講習内容改善に役立つフィードバックを得ることを主な目的とし、今後、資格認定制度との連動を検討する。

また、e-Learning手法導入の試みとして、目録システム講習会の「検索」部分についてプロトタイプ版を作成し、平成18年度に評価、改良を行い、試行することとした。

試行は、いずれも平成18年度の夏以降を予定しており、NII会場で開催する一部の講習会において実施する。地域講習会においても協力が得られる場合は導入することも考えられる。

2.3 目録業務を取り巻く環境変化に適応した講習会等の枠組みについての検討

NACSIS-CAT草創期と現在とでは環境が大きく変わり、草創期において有効だった方法が、現在では機能しづらくなっていることも認めざるを得ない。目録業務は図書館職員の縮減や図書館サービスが多様化する中で今後ますます専門的地位を確保するのが難しくなるだろうし、人件費抑制の中で業務委託は増えることが予想される。こうした現状を踏まえて、目録の品質維持のための研修や認定制度の提案をまとめるにあたり、平成 18 年度に検討する課題として、次の事項を取り上げることにした。

海外書誌ユーティリティ(OCLC)の目録の品質維持のための方策について調査する。(現地調査を含む)

e-Learning の活用も含め、現場の必要性に応じた、実効性のある多様な講習プログラム案を作成する。

各参加館等、地域、NII を基本軸とした目録の品質維持のための枠組みを再構築するための提案を行う。

目録業務委託業者も含めた資格認定制度のあり方や目録担当者のコンピテンシーについてガイドラインを作成する。

同時に、NACSIS-CAT が各参加館にもたらした経済的効果を算出することも必要である。目録担当者の減少という結果につながった面も見逃せないが、こうした効果を大学図書館関係者のみならず大学財政担当者に伝えることも重要である。

3. 目録所在情報サービスを対象とする講習会等の問題点と対応策

以下に、現状の目録システム関連の講習会・研修について問題点等を抽出した。平成 17 年度は目録システム講習会（図書コース）を中心に問題点と対応策の検討を行い、それ以

外の講習会、研修については、アンケート等の資料に基づいて、問題点を抽出したところであり、それぞれの対応策は平成 18 年度に検討する。

3.1 目録システム講習会（図書コース）

目録システム講習会（図書コース）は、NACSIS-CAT を利用して目録作成を行う目録担当者が受講すべき基本的講習会である。NACSIS-CAT 参加館の新規業務担当者を対象に、NACSIS-CAT の図書目録に関連する最新知識の修得と実習を 3 日間にわたり開催する。国立情報学研究所で 5 回、地域講習会として全国 12 回開催されている（平成 16 年度）。年間の参加者は約 450 人である。

3.1.1 問題点・課題

以下に、受講者及び講師へのアンケートに記述された内容から問題点を列挙する。

1) 受講対象

現在の受講対象は新しく目録担当者になった者である。既に受講した者は受講できない。目録業務を離れていた者が再び担当になったから再度受講したいとの希望が寄せられている。また、受講者数に限度があるため、応募しても受講できるとは限らない。何回か応募してやっと受講できたという例もあった。さらに、非常勤職員や派遣職員等常勤職員以外の担当者の参加は難しいであろう。受講機会の拡大は、もっとも大きな課題であると思われる。

2) 開催時期

開催時期については、概ね適当と評価されているが、もっと早い時期あるいは遅い時期等いろいろな要望が寄せられている。特に地域講習会の場合、実施大学の事情もあることから、必ずしも受講者の希望どおりにはしていない。

3) 講習内容

全般

講習会の実施方法、内容、時間配分、教材等に対する受講者の評価は、「適当」が殆どであるが、理解度についてはおよそ 3 分の 1 が理解できなかった、あるいは理解できない部分があったと回答している。具体的に、理解できなかった点としては、階層をもつ資料の登録、流用入力、新規入力、記述文法などが挙げられており、評価とは裏腹に、講習内容の基本的な部分の理解が不十分であることがわかる。

講師について

講師の説明、あるいはプレゼンテーションに差のあることが指摘されている。講師には、「総合目録データベース実務研修」修了者があっているが、当該研修は講師養成を第一に考えたものではないことから、講師によってスキルの差が生じているようである。また、受講会場の設備についても差があることが窺われる。

時間配分

実習時間が足りないとの意見が多く寄せられている。説明に必要な時間もあり、3 日間という期間で十分な時間を確保することは難しいのが現状であるが、事前の自学自習プログラムやカリキュラム構成の見直しにより、説明の時間を少なくして実習とその解説のための時間を確保する必要がある。

各論

多階層書誌の作成、記述文法、洋書目録、レコードのフィールドの意味等について理解できなかったとの意見が多い。このような基本的な事項を講習の場ではじめて聞き、理解するのは難しい。

その他

その他として要望が最も多いのが目録規則の講習である。目録規則の理解は、講習会を受ける前提とされている。しかし、現状では各図書館の目録担当者が目録規則の知識を持っていない例が増えている。

3.1.2 対応策（実施方法、実施内容、実施対象など）

1) 今後の対応策の考え方

e-Learning の大幅な導入

目録業務担当者の多様化、講習会方式による受講人数の限界、開催地、開催時期についての要望への対応等を考慮すると、講習会形式だけでなく、e-Learning 手法の大幅な導入が不可欠であると思われる。また、e-Learning の導入によって、これまで講習内容に含まれていなかった事項、例えば、目録システム講習会では、前提となっている目録規則についての学習を含めることも可能となる。ただし、e-Learning の導入は、他機関での実施状況を調査し、その効果を確認しながら、段階的に進めていくことが肝要であろう。

講習内容の見直し

e-Learning の導入に伴い、現在の目録システム講習会の見直しができる。当面、集合形式の講習会も必要であると考えられるが、その目的、対象は、より明確にされるべきであり、それにしたがって講習内容やカリキュラムの見直しが必要となる。地域講習会の実施方法についても見直しを行うことになる。

講習成果の評価

上述したように、アンケートによると講習会を受講しても理解できなかった（部分がある）という受講者が 3 分の 1 に上っている。講習会の目的が達成されたかどうかを確かなものとするためにも、個々の受講者について理解度を確認することが必要ではないだろうか。具体的には、到達度確認テスト（仮称）の導入を考える。

受講後のフォローアップ、コンサルテーション

目録システム参加館には多様な規模の図書館が参加している。小規模の図書館では、職員数が少なく、目録担当者が相談する相手がいない、ということも聞いている。また、殆どの図書館において目録担当者は、NACSIS-CAT 開始当時に比べると大幅に減少しており、小規模図書館と同じような状況になりつつある。個々の図書館を越えたサポート体制が必要となっている。

2) 平成 18 年度試行事項

平成 18 年度は、上記の対応策を具体化する作業を行う。講習会は、基本的にはこれまでの方法、内容で実施することになるが、以下について平成 18 年度に試行し、以降の検討に繋げていきたいと考えている。

到達度確認テスト（仮称）の導入

講習内容の理解度を確認する方法として到達度確認テストを試行する。到達度確認テストは、受講者に講習会終了後に目録作成テストを実施するもので、その結果により修了証書を発行することを考える。これも将来的には e-Learning の手法により実施することを考える。(参考資料「e-Learning プロトタイプ(達成度確認テスト[検索]」を参照。)

e-Learning のプロトタイプについて

具体的には、目録システム講習会の「検索」の部分について、e-Learning のプロトタイプを導入する。平成 18 年度に試行することによって、今後 e-Learning のコースの検討につながるものである。

3.2 目録システム講習会(雑誌コース)

目録システム講習会(雑誌コース)は、NACSIS-CAT 参加館の新規業務担当者を対象に、NACSIS-CAT の雑誌目録に関連する最新知識の修得と実習を、主として国立情報学研究所において3日間にわたり開催する。地区での開催要望も強いことから、平成 17 年度は地域講習会として九州大学でも開催されている。

「プロジェクト報告」では、雑誌所蔵データの未更新が問題とされた。平成 16 年度の調査によれば、国公私立大学図書館の4分の1から3分の1が2年以上所蔵更新を行っていないことがわかっている。この問題は、図書館システムの機能と大きな関連があると推測されるが、講習会としてどのような対応が可能か検討することになる。

3.2.1 問題点・課題

図書コースと同様に平成 16 年度の受講者及び講師のアンケートを中心に問題点を挙げる。

1) 講習会全般

受講生からは、開催時期、日程について、95%が適当であると回答している。意見としては、回数の増加、年度の早い時期での開催、地方での開催等が挙げられている。また、講師からは、受講者のレベルに差がありすぎることが問題点として挙げられている。

2) 講習内容

講義及び説明内容について、85%以上の受講者が適当としているが、講習内容が理解できなかった(部分がある)との回答が3分の1に上る。理解できなかった点として一番多かったのは目録作成の基礎となる記述文法であり、特に所蔵を記述する部分(VLYR)が理解されていないとの指摘が講師からあった。その他、テキストの内容だけでなく、具体例や経験談等も交えてほしいとの意見が寄せられている。

3.2.2 対応策(実施方法、実施内容、実施対象など)

雑誌コースについても、基本的には図書コースと同様の対応策が考えられるが、詳細な検討は平成 18 年度に行う。

3.3 ILL システム講習会

ILL システム講習会は、図書館間相互貸借(Inter-library loan)サービスのメッセージのやりとりを電子化したシステムである NACSIS-ILL の操作の修得を目的として開催されて

いる。NACSIS-ILL は平成 4 年度からサービスを開始したが、ILL システム講習会はその前年度の 2 月に第 1 回が開催され現在まで続いている。

平成 3 年度の第 1 回開催から平成 17 年度までの修了者数は 2,745 人で、最近の 3 年間では年間約 100 名強が受講している。開催場所は主に国立情報学研究所であり、地域講習会は開催意思を表明した大学で実施され、最近の 3 年間では平成 17 年度に岡山大学で開催されたのみである。ILL の依頼レコード件数が大幅に伸びていた平成 7 年度～10 年度にかけては、地域講習会も 10 箇所以上で開催され、修了者数も年間 250 名以上だった。

カリキュラムは、ILL システム概論、目録検索、複写業務の基本操作、貸借業務の基本操作、応用操作を 2 日間で学ぶよう組まれており、初任者が一通りの操作ができることを目標としている。講習会の再受講は認めていない。

平成 13 年度に自学自習システム NACSIS-SL/ILL が開発された。コンテンツは当時の ILL システム講習会をほぼ忠実になぞったものである。その後変更があった、グローバル ILL や文献複写料金等相殺サービスについての追加は行われていない。

3.3.1 問題点・課題

以下に、受講者及び講師へのアンケートに記述された内容から問題点を挙げる。

1) 受講対象

上述したように、現在の受講対象は新しい NACSIS-ILL 業務担当者であり、既に受講した者は受講できない。現状では、受講者数に限度があることから、今の実施体制では難しいとされているが、NACSIS-ILL 業務を離れていた者が再び担当になったとき等に再度受講したいとの希望が寄せられている。また、受講者数に限度があるため、応募しても受講できるとは限らない。受講可能になった時には、自身の能力が講習会のレベルを超えていたというケースも多い。

2) 開催時期

開催時期については、概ね適当と評価されているが、初任者対象なので人事異動の多い時期（4 月や 10 月）に実施することが希望されている。

3) 講習内容

全般

講習会の実施方法、内容、時間配分、教材等、に対する受講者の評価は、「適当」が殆どであり、理解度も高い。一方で基礎的な内容については初任者にとっては有用であるが、業務を一通り行っている受講者にとっては冗長であるため、1 日目と 2 日目の密度の違いがあるとの感想をもたれている。また、2 日目の内容については業務で出てくるさらに多くのパターンの解説が要望されている。

講師について

講師についてはばらつきがあることが指摘されている。「総合目録データベース実務研修」の修了者を講師としているが、業務経験者でなければ講師を務めにくいいため講師は慢性的に不足している。

時間配分

1 日目（基礎）に比べて 2 日目（応用）が駆け足になっているとの指摘がある。また、グローバル ILL、料金相殺制度についての説明が足りないため時間をかけてほしいとの

要望も多い。

その他

この講習会の次のレベルとして、ある程度業務経験のある人を集めた事例紹介や意見交換の講習会が希望されている。

また、受講者アンケートとは別に、NACSIS-ILL を取り巻く環境から指摘されている問題には次のようなものがある。

NACSIS-ILL は相互貸借業務を系統的に支援するサービスであり、運用は各図書館コミュニティで定められたルールに従って行われている。NII が行う講習会もシステム操作を修得する範囲にとどまっており、相互協力業務を解説する内容は含まれていない。

昨今、相互協力業務そのものを理解しないまま業務が遂行されている例が見られ、相互協力業務全般に係る研修も要望されている。

3.3.2 対応策（実施方法、実施内容、実施対象など）

これら要望や問題点を分析し、集合教育で取り扱うもの、e-Learning とするもの、FAQ を用意するもの、NII が実施するもの、各図書館コミュニティで実施するもの等を区別して対応するよう平成 18 年度検討する。

3.4 総合目録データベース実務研修

総合目録データベース実務研修は、目録所在情報サービス参加機関において中核的な役割を担う人材を養成し、併せて目録及びILLシステム講習会講師担当者の育成を図ることを目的にして開催されている。

昭和61年度から平成17年度までの修了者数は504名で、平均年間20名が修了している。開催会場は国立情報学研究所である。

昭和61年度は8週間のカリキュラムが組まれていたが、翌年度から4週間に短縮され、平成6年度から3週間、平成12年度から2週間となった。カリキュラムは、目録所在情報サービスの基本思想、目録情報の基準とその運用といった講義、事例報告、グループ討議・演習の他に、講習会講師養成のためのプレゼンテーション演習が行われている。その年、目録関連で懸案となっている課題（新CAT対応、遡及入力事業、品質管理等）を中心にカリキュラムを組んでいる。

3.4.1 問題点・課題

以下に、受講者のアンケートに記述された内容から問題点を列挙する。

1) 受講対象

機関内での選考が慎重になされる研修なので一般の講習会のようなミスマッチは少ないようである。図書館における目録業務の縮小化により、受講対象者が減少する傾向にある。

2) 開催時期・期間

雑誌契約の時期が重なっているので担当者は受講が難しいという大学と契約は終わっているのよいという大学の2通りの意見がある。また目録担当としては納品が比較的

少ない5～6月がよいという意見もある。

期間については、職場を空けるには2週間が限界であるため現状でよいとの意見が多いが、カリキュラムを絞ってさらに短縮して欲しいという意見もある。

3) 講習内容

講師養成とNACSIS-CAT/ILLについての知識を深めることの2つの目標が設定されているため、受講者によってはそのバランスを量りかねている面が見られる。

また、本研修修了者が目録システム講習会・ILLシステム講習会の講師となるしくみだが、講師としてブラッシュアップを行う機会がなく、目録担当から他の担当へ異動した後の講師は難しいとの指摘がある。

3.4.2 対応策（実施方法、実施内容、実施対象など）

平成18年度に本研修の目標を再設定について検討する。

4. 平成18年度検討事項

4.1 海外書誌ユーティリティとの比較

4.1.1 海外書誌ユーティリティの品質管理及び研修体制の調査

比較検討の対象として、米国OCLCのWorldCatにおける、品質管理及び研修体制を調査した。OCLCも多くの重複書誌レコードを抱えており、その解決(deduping)が大きな課題となっている。今回の調査は、OCLCのウェブサイトの情報及び紀伊國屋書店OCLCセンターからの情報による。WorldCatとNACSIS-CATでは、運用体制(サービス利用料金の徴収、参加館区分)やデータベース規模などの相違があり一概には論じられないが、総合目録の品質管理方法、地区単位での研修事業体制、e-Learningでのトレーニングコース提供、分かりやすいマニュアル作成など参考になるところが多いと思われる。

平成18年度は、現地での調査を含め、トレーニングコースの内容やコース作成にあたってのノウハウ等さらに詳細な調査が必要である。

4.1.2 OCLC WorldCatの概要

OCLCは、世界最大の書誌ユーティリティであり、各国の53,000を超える大学図書館や研究機関により総合目録データベースWorldCatが構築されている。なお、WorldCatの利用(登録)にはサービス利用料金が必要である。

WorldCatとNACSIS-CATのデータベース規模比較は以下のとおり。

表1 WorldCatとNACSIS-CATの比較

	サービス開始	参加機関数	書誌レコード数	所蔵レコード数
WorldCat	1971年	53,548	約64,000,000	約1,031,850,000
NACSIS-CAT	1984年	1,133	約7,946,000	約81,840,000

WorldCatの参加機関は、3つのレベルに分けられる。1) Governing Members館(以下、GM館)は、OCLCメンバー評議会への代表権、議決権を持ち、全ての新規受け入れ資料をWorldCatに登録することが義務付けられている。GM館のOCLCサービス利用料金には、優

待価格が適用される。2) Members 館は、GM 館からの推薦があった場合のみ、OCLC メンバー評議会代表への立候補が可能であるが、議決権はない。Members 館は、一部の資料のみを WorldCat に登録すればよいが、サービス利用料金は通常料金が課金される。3) Participant 館は、OCLC のサービスを利用するのみの図書館（機関）である。

4.1.3 OCLC WorldCat での品質管理

NACIS-CAT と同様に、WorldCat では各参加館は WorldCat マスターファイルを検索し、書誌レコードが存在した場合は、その書誌に各館の所蔵（シンボル）を登録する。書誌がなかった場合は、全ての参加館は新規に書誌を作成することができる。WorldCat においても共有データであるマスター書誌レコードの品質管理（quality control）は重要な要素である。WorldCat では、4.1.4 で述べる様々な研修コースの実施に加え、以下のような方法により、総合目録データベースの品質管理が行われている。

1) 書誌レコードの修正

WorldCat では、既存のレコードのレベルによって、National Enhance、Regular Enhance の修正権限、フィールド毎の修正権限等が規定されている。

WorldCat のマスター書誌に対する修正権限を持つ Enhance Library（2006 年 1 月現在 195 機関）が認定されている。Enhance Library 以外の図書館がマスター書誌の内容に間違いを発見した場合には、OCLC に連絡を行う。OCLC では、その内容を判断し、必要に応じた修正を行う。

なお、レコード修正ではなく、内容注記を追加するようなレコードの充実のための作業は全参加館に権限が与えられている。

2) CIP レコードのアップグレード

図書出版時に WorldCat に取り込んだ CIP データを OCLC で出版後に正しい書誌レベルにアップグレードを行う。

3) 重複レコード検出統合処理

DDR（Duplicate Detection and Resolution）プログラムを用いた機械的な同定処理によって重複レコード検出統合処理を行う。ラテン文字レコードのみが対象であり、定期的を実施している状況ではない。

4) 参加館自身の品質管理責任

ユーザから頻繁にエラーレコードを指摘された場合 OCLC の品質管理部署が登録館に指摘を行う。連絡を受けた図書館は、内部の品質問題として解決する義務がある。

5) マニュアル等

WorldCat 書誌レコード作成の基準となる共通マニュアルである「Bibliographic Formats and Standards」をはじめ、様々なマニュアルが Web ベースで提供されている。WorldCat 接続クライアント Connexion では、入力時にマウスクリックによりマニュアルの関連部分が表示できる仕組み（MARC Field Help）が組み込まれている。

4.1.4 OCLC における WorldCat トレーニングコース

OCLC 本部では、NII が目録システム講習会で実施しているような集合研修のトレーニングコースは提供しておらず、詳細、個別な研修・講習会は、地区代理店（regional service

providers)の担当になっている。OCLC本部では、Webベースの利用マニュアルやオンラインチュートリアルを提供している。

地区代理店では、WorldCatのトレーニングコースを含め、特徴的なトレーニングコースが数多く提供されている。地区代理店のWorldCatのトレーニングコースは基本的には有料の集合研修だが、一部、無料で閲覧できるWebコースもある。例えば、「OCLC Western Service Center」は、OCLCの製品・サービスだけを取り扱う組織だが、ノンメンバーにもコースが開放されている。有料コースの場合は、地区メンバー外には割高で提供されている場合が多い。

4.1.5 オンラインチュートリアル、地区代理店による研修メニューの例

OCLCのホームページでは、WorldCat登録に関して自学自習が可能なWebベースのオンラインチュートリアルが提供されている。例えば「Using OCLC Connexion Browser: An OCLC Tutorial」では、9つのサブコースを順番に学習することでConnexionシステムを用いたWorldCatへの基本的な登録技能が習得できるようになっている。それぞれのサブコース(概要、検索、新規書誌作成、書誌修正等)は平均45ページ・標準学習時間25分程度であるが、MARCタグの入門編は、98ページ・標準学習時間40分のかなりボリュームのあるコースである。

各代理店のホームページ上では、WorldCatコースメニューが掲載されており、Webから受講申込みも可能である。また、NELINETのように、カスタマイズ可能なトレーニングコースを提供しているところもある。目録に関するコースは集合研修が多いようであるが、オンラインのコースも様々提供されている。

標準的な目録登録の集合研修では、例えばOCLC Western Service Centerの1日間でWorldCatの検索技法、書誌作成、書誌修正等を習得する「Cataloging Transition Workshop for OCLC Cataloging Users」コースなどがある。なお、このコースの受講料は、Westernメンバーが\$55、ノンメンバーが\$125である。

4.2 e-Learningの導入に向けて

現在、NII及び各地域で実施されている目録システム講習会は、集合研修として一定の成果を上げている有効な方法ではある。しかし、現在の講習会では、初心者を対象とした3日間のコースのみで受講は1回に限られているため、数年ぶりに目録担当になった場合や年度途中の異動など、柔軟に対応できる研修体制になっていない等の問題点があることは上述したとおりである。つまり、受講側にとっては講習場所と日程が限定されていることが集合研修での最大のネックになる。

一方、OCLCでも様々な形で導入されているe-Learningを用いたコースは、どこからでも、いつでも、自分のスケジュールに合わせて自由な時間設定で自学自習できることが最大のメリットである。

平成18年度は、e-Learningの特性を活かしたコンテンツを検討し、段階的に作成しつつ、e-Learningのメリットと集合研修のメリットを組み合わせた研修プログラム全体の体系を再編することが必要である。

なお、e-Learningのコンテンツは、作成しただけでは陳腐化していくという危険性があ

るので、試行的に実施しつつ、適宜、コンテンツの内容を見直す運用が重要である。

4.3 地域活動との連携について

大学図書館は地域においてさまざまな活動を行っており、なかでも人材育成を目的とした研修は活発に行われているプログラムのひとつである。3.で見たように、集合形式の講習会・研修だけで、目録担当者や相互利用担当者のスキルが維持・向上されるわけではなく、自学自習ができる環境や講習会・研修のフォローアップ体制の整備が重要である。

そこで、従来の研修のように特定の日時・対象者にのみ行うものの他、目録担当者の継続的な技能習熟の機会として、いつでも自習できる e-Learning や、いつでも相談できるフォローアップ体制の整備を地域活動との連携のなかで考えることができないか、検討する。

4.3.1 目的

目録担当者の総合目録データベースを中心とする目録に関する知識・スキルを向上することにより、各参加館における目録業務の円滑な遂行と、総合目録データベースの品質の維持を図る。

4.3.2 連携事業モデル

地域活動との連携の枠組みにおいて、下記のような連携事業モデルが考えられる。個々の事業の具体的内容及びその有効性については、平成 18 年度の検討課題である。

1) NII 目録システム地域講習会の開催

現行の目録システム地域講習会は、必ずしも地域活動として実施されてはいないようであり、また、その実施体制についても課題とされている。これを地域活動の一環として、NII と共催で実施することが考えられる。この地域講習会の実施にあたっては、講師の確保が重要で、講師には、目録システム理解の他、説明スキル、プレゼンテーションの技術などが求められており、地域のなかにそのような講師を確保していく必要がある。

2) 研修教材（テキスト、e-Learning 教材）の作成

目録システムの習得・習熟のための自習教材を今後さらに充実させる必要がある。教材の作成を地域で分担して行うことが有効であると考えられる。特に地域内の担当者が協働して教材を作成することは、地域でのまとまりが生まれることが期待できるし、担当者の目録に関する理解がさらに深まるという効果も考えられる。

3) 目録担当者のフォローアップ体制の整備

講習会受講後のフォローアップの必要性が高まっている。目録担当者の業務支援体制としては、現在の NII の目録担当者向けサポートのウェブサイトがあるが、それ以外のあり方が地域活動との連携のなかで考えられないか、検討する。

4) 事業の実施

連携事業のなかで経費を要するものについては、NII の委託事業として実施することが考えられる。その場合、成果物は全ての参加機関で共有可能となろう。

4.4 資格認定制度について

「プロジェクト報告」で提案された、「データ作成者（外注業者も含む。）に対して資格・

認定を与えて品質を維持する制度」について、本WGで検討し、考え方を以下のとおりまとめた。

4.4.1 企業に対する資格認定制度

現状の目録システム講習会レベルの入門的な目録講習会を受講することで、企業に対する資格認定を行うことは、有効な施策とは考えられない。個人に対する資格認定は、企業全体の質を保証するものとはならないからである。

企業に対する資格認定は、個人レベルのものとは別の次元で、つまり有資格者の人員数、継続的な教育研修体制、目録作成業務の受託実績等その企業に対する総合的な評価により行われるべきである。

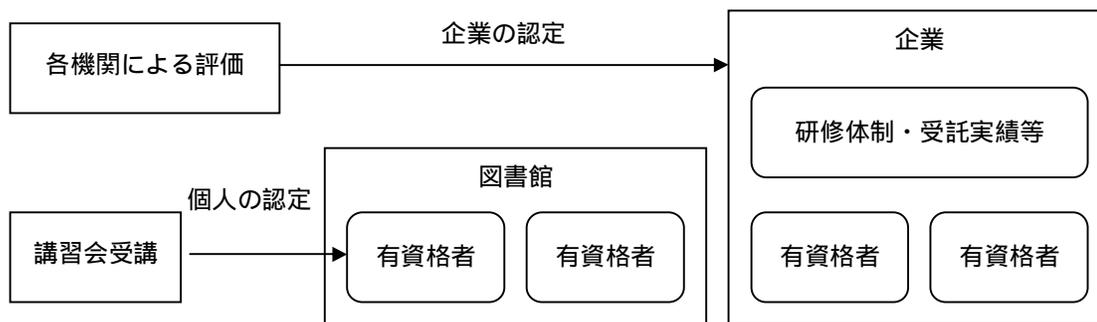


図1 企業の認定と個人の認定の関係

また、企業の総合的な評価は、NIIが権威をもって行うものではなく、各機関の責任において行われるものとする。

一方、「プロジェクト報告」で提案されているように、各機関による評価に際して、その指針となるべき総合的な評価のガイドラインをNIIが提示する必要がある。

4.4.2 個人に対する資格認定制度

個人に対して資格認定を付与する方法としては、試験による資格認定制度、受講による資格認定制度の2種類が考えられる。それぞれ次のようなメリット・デメリットがあると考えられる。

表2 個人に対する資格認定方式の比較

方式	メリット	デメリット
試験による場合	・一定の能力水準を保てる	・短期間での試験実施と採点 ・落第者に対する対応が必要
受講による場合	・厳密な試験・採点が不用 ・落第者に対する対応が不用	・聴講者の能力水準を高める 方策が必要

試験の場合、遠隔地からの受験者が、再試験を受けなければならなくなった時の問題を考えると、受講による方式の方が問題が少なく、その上で受講者の能力水準を高め、意欲

づけを行うために、学習内容を確認する小テストや最終試験を導入することは有効であると思われる。講義過程の再構築とともに、効果的なテストの実施方法について検討する必要がある。

さらに、e-Learning の手法を導入することで、これらの小テストや最終試験は、既受講者の再受講や資格認定の遡及的付与にも活用できることにもなる。

今後、講習会・研修や e-Learning コース全体として、どのような資格認定を授与するか、段階的な資格認定も含めて、検討を行う。

以上のような資格認定制度をとる場合、現在の『目録所在情報サービス利用細則』の利用者に関する規程にある「国立情報学研究所が実施する目録講習会の修了者が責任をもち、総合目録データベースの品質管理を行うこと。(第2条二)」の部分を改訂し、目録担当者に対して資格認定を義務化する必要がある。そうであれば、目録担当者が多様化している現状においては、目録作成に携わる全ての担当者が受講できる制度としなければならない。

4.5 目録担当者のコンピテンシー

4.5.1 海外のコンピテンシー事例

1) Special Libraries Association (SLA) (米国専門図書館協会)

SLA の "Competency for information professionals of the 21st century. revised ed. 2003" では、専門図書館の情報専門職としてのコンピテンシーを提言している。ここでは、専門的コンピテンシー (professional competencies) として、「情報部門のマネジメント」、「情報資源のマネジメント」、「情報サービスのマネジメント」、「情報ツールと技術の応用」の各分野における幅広い技能が 23 種類と、その応用例が提示されている。これに加えて、「チャレンジを求め、新しい好機を活用する」、「効果的にコミュニケーションを図る」などの個人的コンピテンシー (personal competencies) が 15 個提示されている。

例えば目録業務に係わる専門的コンピテンシーは、「B. 情報資源のマネジメント」中に次のように記述されている。

「B.1 作成、入手から廃棄にいたるまで、情報のトータルなライフサイクルを管理する。情報の組織化、類型化、目録、分類、提供、さらに系統的分類、イントラネット/エクストラネット・コンテンツやシソーラスの作成、管理を行う。」

2) The Association of Southeastern Research Libraries (ASERL) (米国南東部研究図書館協会)

ASERL の "Shaping the future: ASERL's competencies for research librarians. 2001" では、図書館情報学の教員、新旧の研究図書館員、研究図書館職員を雇用する責任者のために、研究図書館員に求められるコンピテンシーを提言している。ここでは、研究図書館の将来展望の概説の後、33 個のコンピテンシーが 5 つにグループ化されて提示されている。

例えば目録業務に係わるコンピテンシーとしては、第 4 グループの総括記述の中に、次のように記述されている。

「4. 研究図書館員は、あらゆる形態の既存・新規の情報資源について、その構成・組織化・作成・管理・配付・利用・保存に関する知識をもつ。」

4.5.2 コンピテンシーの視点の応用

上記のように、図書館職員のコンピテンシーとは、目録・分類などの特定分野の、個別的・具体的技能の目標値として設定されているわけではない。むしろ、図書館のサービスと能力を向上させるための、総合的・理想的な目標として記述されているのである。

例えば ASERL は、次のようなコンピテンシーを提示している。

- 「・重要な事柄に焦点を合わせるために計画し、優先順位をつけ、仕事を組織化する。
- ・図書館外の人々と効果的に意思伝達する。
- ・大学内外の協力関係を形成、維持する。
- ・図書館サービスの重要性を、高等教育界に伝えることができる。
- ・研究図書館がどのようにして学術コミュニケーションを支援し、拡大するかを理解している。」

これらは、目録作成業務という次元ではなく、目録業務のマネジメントという次元で語られるべきものである。具体的には、学内外に対する目録業務の理念・重要性の説明能力、目録業務体制の管理能力、資料組織化に係わるプロジェクトの企画能力、目録担当者への指導能力など、目録の世界でのリーダーシップの育成に、大きな関わりをもっている。

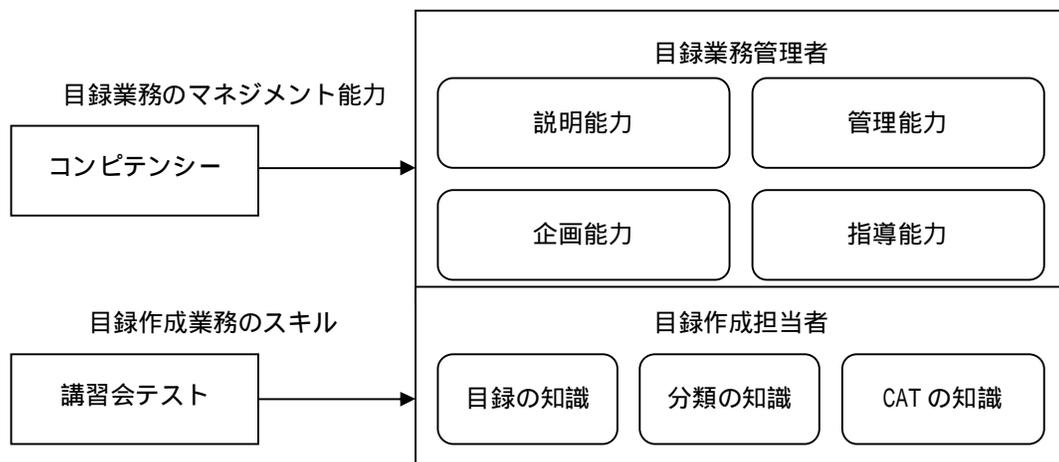


図2 目録に関わるコンピテンシーの位置づけ

その意味でコンピテンシーは、目録界のリーダーを育成するためのプログラムの企画・立案に有効となる。よって、現在目録所在情報サービスで中核的な役割を担う人材の育成を目的とした「総合目録データベース実務研修」の、改善もしくは再構築の理論的バックグラウンドとすることが考えられる。

平成 18 年度は、日本の図書館員の実状にあったコンピテンシーを確立し、それに基づいた研修プログラムを検討する。

5. まとめと今後の検討課題

今年度、当 WG は「プロジェクト報告」で提案された項目に基づき、平成 18 年度以降の目録所在情報サービスを対象とする講習会等の内容や実施方法について、以下の 2 つの方

向から検討を行った。

- 1) 平成 18 年度目録システム講習会に向けた対応策の検討
- 2) 目録業務を取り巻く環境変化に適応した講習会等の枠組みについての検討

1)については、目録システム講習会(図書コース)を中心に問題点と対応策の検討を行い、他の講習会、研修については問題点の指摘に留まった。

- ・平成 18 年度開催の目録システム講習会等は原則として従来通りの方法、内容で実施する。
- ・平成 18 年度の夏以降 NII で開催する目録システム講習会(図書コース)において、到達度確認テスト(仮称)と「目録検索」における e-Learning のプロトタイプについて試行的に導入する。その結果も踏まえ、講義内容やカリキュラムについて更に踏み込んだ検討を行う。
- ・他の講習会、研修については、問題点を詳しく分析しながら対応策の検討を行う。
- ・平成 17 年度に実施する業者向け講習会の結果を踏まえ、目録業務委託業者への対応を検討する。

2)については、以下の 5 項目を取り上げ検討した。平成 18 年度も引き続き、これらの項目について議論を重ねながら、全体として講習会等の枠組みについてのモデルを検討する。

海外書誌ユーティリティ調査

米国最大の書誌ユーティリティである OCLC の WorldCat について、ウェブサイトや書店から情報を入手し、NACSIS-CAT との比較を行った。

- ・WorldCat は NACSIS-CAT と規模や基盤が異なるが、品質管理、研修体制、e-Learning コースウェアを検討する上で参考となることが確認できた。
- ・平成 18 年度は引き続き OCLC の事業について調査を進め、可能であれば現地での調査を実施し、その結果を踏まえながら、講習会等の枠組みについて検討する。

e-Learning の活用

e-Learning の手法を調査しながら、その活用方法について検討した。

- ・1)で述べたように e-Learning の手法については到達度確認テスト(仮称)や講習の一部において試行的に導入を図る。
- ・平成 18 年度は e-Learning の特性を活かしたコンテンツを検討し、集合形式の講習会と組み合わせながら、目録担当者の様々なニーズに対応した研修プログラムの内容及び実施方法について検討する。

地域活動との連携

目録担当者に対するサポート体制の整備が重要との認識に立ち、その役割を地域活動との連携で担う事業モデルを検討した。

- ・地域との連携を強化する事業として、地域における講習会開催のほか、研修教材の作成や目録作成上の問題をフォローアップする体制の整備が必要である。
- ・平成 18 年度は更に事業モデルについて議論し、具体的内容及び有効性について検討する。

資格認定制度について

目録業務委託業者及び個人に対する資格認定制度についてそれぞれ検討した。

- ・各参加館にとって、業者の総合評価が重要であり、その指針となるべき総合評価のガイドラインの策定が必要である。
- ・個人の資格認定制度は受講によるものが望ましいと思われるが、多様化する対象者の受講機会を広げるために e-Learning 手法の活用等実効性のある方法を検討する必要がある。
- ・平成 18 年度は e-Learning コースウェア、講習会等における資格認定の方法について検討する。
目録担当者のコンピテンシー
目録業務におけるコンピテンシーについて検討した。
- ・目録業務におけるコンピテンシーは目録業務のマネジメントあるいはリーダーシップの育成という観点でとらえるべきものである。
- ・平成 18 年度は日本の図書館職員の実情にあった目録担当者のコンピテンシーについて調査・検討し、それに基づいた研修プログラムを検討する。

参考資料

1. WGの活動

1.1 メンバー

早瀬 均	名古屋大学附属図書館事務部長（主査）
片山 俊治	広島大学図書館部学術情報マネジメントグループ担当課長（副主査）
横井 有紀	釧路工業高等専門学校庶務課情報資料係長
米澤 誠	東北大学附属図書館工学分館管理係長
澤村 裕	関西学院大学図書館運営課主任
藤田 儒聖	島根県立大学メディアセンター司書
矢崎 美香	九州共立大学附属図書館業務課主査
相原 雪乃	国立情報学研究所開発・事業部企画調整課課長補佐
茂出木理子	国立情報学研究所開発・事業部コンテンツ課課長補佐

事務局

成澤めぐみ	国立情報学研究所開発・事業部企画調整課研修係長
藤井 眞樹	国立情報学研究所開発・事業部企画調整課研修係

1.2 審議の経緯

			活動内容
平成 17 年 度	平成17年	12月7日	第1回ワーキング・グループ会議開催
		12月13日	平成17年度第2回図書館情報委員会でワーキング・グループ設置が事後承認
		12月16日	第2回ワーキング・グループ会議開催
	平成18年	1月11日	第3回ワーキング・グループ会議開催
		1月26日	第4回ワーキング・グループ会議開催
		2月8日	第5回ワーキング・グループ会議開催
		2月21日	到達度確認テスト（仮称）プロトタイプ版導入
		2月22日	第6回ワーキング・グループ会議開催
		3月8日	NACISIS-CAT入力業務等請負業者を対象とする目録システム講習会（試行）において、到達度確認テスト（仮称）の「検索」を実施
		3月13日	平成17年度第3回図書館情報委員会において中間報告書内容を報告

2. インストラクショナル・デザインの手法の導入

インストラクショナル・デザイン（ID）とは、「教育を短期間で効率よく効果的に行うための手法」であり、決められた工程（分析、設計、開発、実施、評価）に従った作業や明確な目標設定などを行うことにより、効果的かつ適切に教育活動を実施できる手法といわれている。この手法を、当時 NII の教育事業のコンサルティングを行っていた会社（ユニシス・ラーニング）に紹介され、WG メンバーが、第 1 回会合で ID 入門の講義を受けた。

この手法により、既存コースと、目録担当者に期待される KSA（知識、スキル、態度）の分析を行い、検討の参考としたのが次の 2 つの資料である。

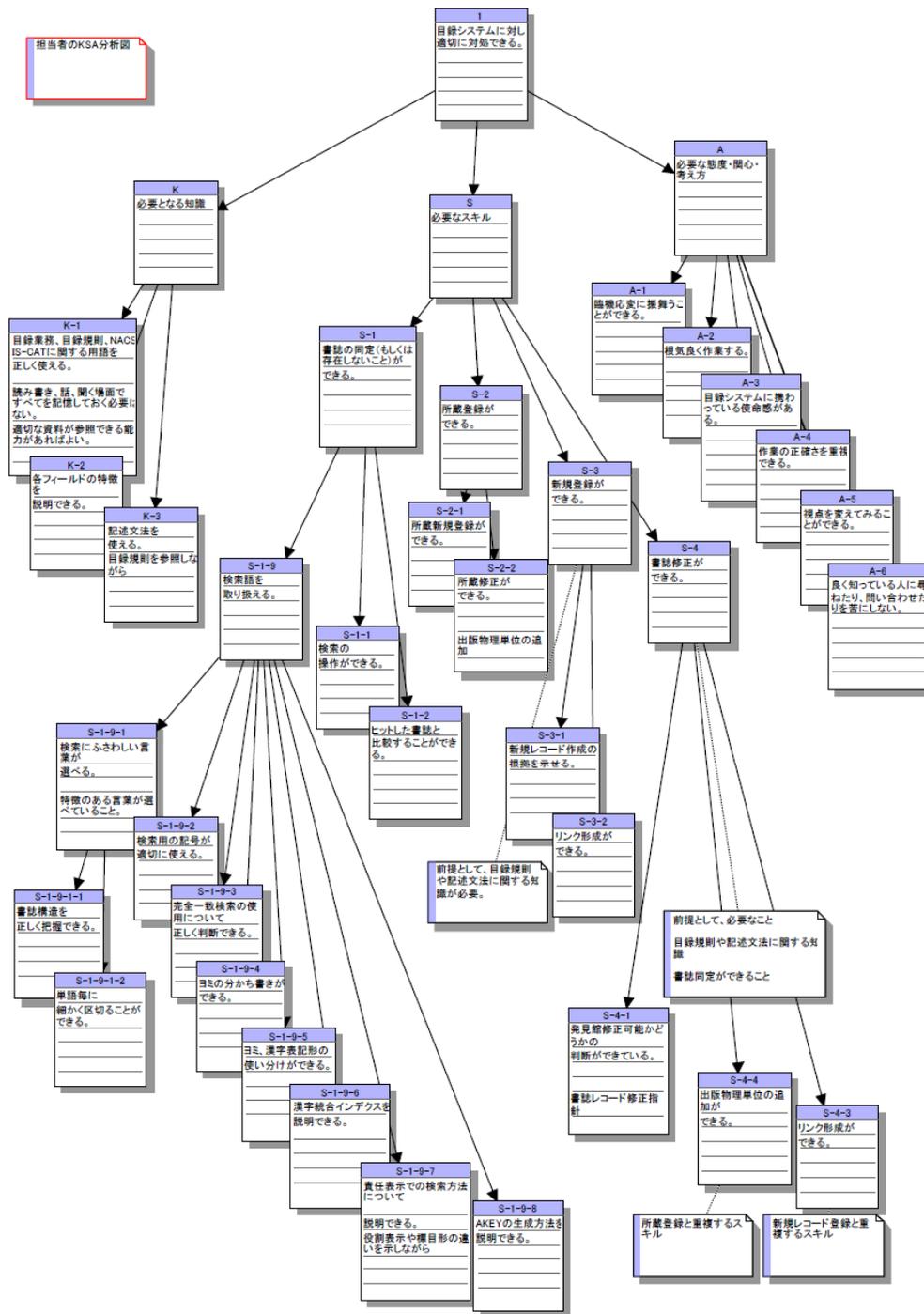
「目録所在情報システム関連講習会・研修」既存コース分析

名称	目録システム講習会・目録システム地域講習会	ILL システム講習会・ILL システム地域講習会	総合目録データベース実務研修
コース概要	目録所在情報サービス参加機関の目録業務担当者が共通に理解しておくべき、総合目録データベースの構成、内容、データ登録の考え方（入力基準）を修得する機会を提供する。 受講時の主な担当業務により、「図書コース」「雑誌コース」の 2 コースを設ける。	NACSIS-ILL システムの運用方法に関する知識を修得する機会を提供する。	目録所在情報サービス参加機関において中核的な役割を担う人材を養成し、併せて目録及び ILL システム講習会講師担当者の育成を図る。
学習目標	目録システムを操作して目録情報の登録、修正などを行うことができる。	ILL システムを操作して、学術文献の複写・現物貸借の依頼、受付などを行うことができる	目録入力の規則に対する解釈の判断、CAT/ILL 操作研修の講師ができる
提案理由	既存コースとして開発済み。 新任の目録業務担当者が NACSIS-CAT システムの操作方法を修得するためのコースとして、継続実施が必要。	既存コースとして開発済み。 新任の ILL 業務担当者が NACSIS-ILL システムの操作方法を修得するためのコースとして、継続実施が必要。	既存コースとして開発済み。 目録情報の基準や目録規則の最新動向を、目録所在情報サービス参加機関に周知させ、総合目録データベースの品質を向上させるため、また定期的に実施される目録及び ILL システム講習会の講師を育成するためには継続実施が必要。

位置づけ	<p>本コース受講前にOJTなどにより、目録業務の概要を把握していることを前提とする。</p> <p>本コースは「図書コース」「雑誌コース」に分かれているが、受講順序に前後関係はなく、担当によっていずれか、もしくは両方のコースを受講する。</p> <p>コース受講後は目録情報基準の参照方法に基づいて基本的な目録規則をOJTにより学ぶ。</p> <p>一定のOJT期間を経て、目録業務の中核的な役割を担う人物、目録及びILLシステム講習会の講師を担当する人物は「総合目録データベース実務研修」を受講する。</p>	<p>本コース受講前にOJTなどにより、ILL業務の概要を把握していることを前提とする。</p> <p>コース受講とは別に各機関のレンディングポリシーに基づいて、学術文献の相互利用に関するルールやマナーをOJTにより学ぶ。</p> <p>一定のOJT期間を経て、目録及びILLシステム講習会の講師を担当する人物は「総合目録データベース実務研修」を受講する。</p>	<p>本コース受講前にOJTを介してNACSIS-CAT/ILLシステムの操作は熟知していることを前提とする。また目録システム講習会を受講していることが望ましい。</p> <p>コース受講後は目録システム講習会もしくはILLシステム講習会の講師を担当するとともに、各機関の目録所在情報サービスの中核的な役割を担う。</p>
タスクとの関係	NACSIS-CATシステムを利用した書誌、所蔵の登録、修正	NACSIS-ILLシステムを利用した学術文献相互利用（複写・現物貸借）の依頼、受付	目録システム講習会もしくはILLシステム講習会の講師担当、目録入力規則に対する解釈の判断等、目録情報の適正な運用。
学習対象者定義	<p>NIIを会場とするコースとしては</p> <p>「図書コース」を定員34名で年5回実施、合計170名（H17年度）選択コース</p> <p>「雑誌コース」を定員34名で年3回実施、合計102名（H17年度）選択コース</p> <p>上記の他に「目録システム地域講習会」として各地域の大学図書館と共催で地域別の講習会を実施</p> <p>「図書コース」は12箇所（H17年度）合計定員262名</p> <p>「雑誌コース」は1箇所のみ（H17年度）で定員16名</p> <p>受講者は目録所在サービスの参加機関に所属しており、機関からの推薦により申込を行う。</p>	<p>NIIを会場とするコースとしては</p> <p>定員34名で年3回実施、合計102名（H17年度）選択コース</p> <p>上記の他に「ILLシステム地域講習会」として各地域の大学図書館と共催で地域別の講習会を実施</p> <p>H17年度は1箇所のみで定員30名</p> <p>受講者は目録所在サービスの参加機関に所属しており、機関からの推薦により申込を行う。</p>	<p>年1回16名定員で実施（H17年度）</p> <p>受講者は目録所在サービスの参加機関に所属しており、機関からの推薦により申込を行う。</p>

コース寿命とバージョンアップ	NACSIS-CATシステムの寿命（運用期間）に依存する。システムの基本操作方法に変更がなければバージョンアップは不要 NACSIS-CATシステムに変更があった場合に、バージョンアップが必要。	NACSIS-ILLシステムの寿命（運用期間）に依存する。システムの基本操作方法に変更がなければバージョンアップは不要 NACSIS-ILLシステムに変更があった場合には、バージョンアップが必要。	目録情報の基準、目録規則の改定頻度に依存する。最新動向を反映するには定期的な内容の見直しが必要。
学習対象者分析	学習者の年齢層については特定できないが、比較的幅は広いと思われる。NACSIS-CATの担当者としては初任の図書館職員を想定。	学習者の年齢層については特定できないが、比較的幅は広いと思われる。NACSIS-ILLの担当者としては初任の図書館職員を想定。	学習者の年齢層については特定できないが、比較的幅は広いと思われる。現在の目録業務担当者、または過去に2年以上の目録業務経験を有している職員を想定。
前提知識	目録業務の概要を理解していること。目録規則を記憶している必要はないが概要を理解しており、必要な規則を関連資料から参照できること。	ILL業務の概要を理解していること。	目録及びILLシステム講習会を受講し、OJTを介してNACSIS-CAT/ILLシステムの操作は熟知していること
学習環境	NIIもしくは地域講習会の会場。「雑誌コース」については地域講習会の会場に限られており、NII会場での受講が必要になるケースが多い。	NIIもしくは地域講習会の会場。地域講習会の会場に限られており、NII会場での受講が必要になるケースが多い。	NIIの会場および見学可能な関連機関。
技術レベル	NACSIS-CATシステムの実習環境が必要。	NACSIS-ILLシステムの実習環境が必要。	プレゼンテーション演習の実施環境。ネットワーク環境、NACSIS-CAT/ILLシステムの利用環境。1人1台のPC。
標準学習期間/時間	現行コースのカリキュラムでは3日間	現行コースのカリキュラムでは2日間	現行コースのカリキュラムでは2週間
教育評価要件レベル	コースが対象とする範囲においては、操作実習の状況から客観的な理解度の把握は可能。ただし、タスクにおける受講者の品質については「目録基準」などコース対象範囲外の要素の関連が強く、本コースとの関連で評価することは困難。	コースが対象とする範囲においては、操作実習の状況から客観的な理解度の把握は可能。ただし、タスクにおける受講者の品質については各機関のレンディングポリシーやマナーなどコース対象範囲外の要素の関連が強く、本コースとの関連で評価することは困難。	目録情報の基準や目録規則が参加機関で正しく運用されているかどうかを評価することが必要。総合目録データベースの品質が向上すれば教育効果があつたと確認できる。研修実務に関しては、受講者が講師を担当する「目録システム講習会」、「ILLシステム講習会」の講師アンケート/受講者アンケートなどから評価が可能。
他コース	他社から提供されているコースはない	他社から提供されているコースはない	他社から提供されているコースはない

での代替可能性			
既存コース/教材の利用	本コースは既に関済済み	本コースは既に関済済み	本コースは既に関済済み
新規開発の是非	本コースは既に関済済み	本コースは既に関済済み	本コースは既に関済済み
納期	本コースは既に関済済み	本コースは既に関済済み	本コースは既に関済済み
メディア分析	講師主導の集合研修。	講師主導の集合研修。 e-Learning が作成されているものの、大幅な改訂が必要な状態。	講師主導の集合研修。 関連機関の見学を含む。 グループ討議・演習有り。
主な学習形態	講義 + 実習	講義 + 実習	講義 + 見学 + 演習 共同討議
納品物の著作権	NII に帰属	NII に帰属	
教材への要件	講師は NII 所属教職員、もしくは「総合目録データベース実務研修」修了者。	講師は NII 所属教職員、もしくは「総合目録データベース実務研修」修了者。	講師は NII 所属教職員、及び大学図書館職員、関連機関職員。
運用要件	「総合目録データベース実務研修」の受講者が講師となるため、講師によって研修の品質にばらつきが発生することが懸念される。	「総合目録データベース実務研修」の受講者が講師となるため、講師によって研修の品質にばらつきが発生することが懸念される。	実務課題の発表や、グループ討議を行うため、目録業務の経験がないと学習効果を上げることは難しい。グループ演習の成果物をウェブサイトに掲載している。
モチベーションの維持方法	操作中心のコースであるため、NACSIS-CAT システムの背景にある目録業務自体についての知識が不足していると、研修内容の意義が見出せず、モチベーションが低下する恐れがある。	操作中心のコースであるため、NACSIS-ILL システムの背景にある ILL 業務自体についての知識が不足していると、研修内容の意義が見出せず、モチベーションが低下する恐れがある。	研修期間が2週間におよぶため学習目的を常に明示し、学習意欲を高める工夫が必要。見学会や個人発表、グループ討議が含まれており、モチベーションの維持に効果があると思われる。
評価計画書	コース単体の評価は難しいが、NACSIS-CAT/ILL 関連研修体系全体では、総合目録データベースの品質向上が最終的な評価目標となる。データベースの品質をどのように評価するかが課題。評価基準を定めた上で、本コースのカリキュラムに関連する内容を反映することが望ましい。	コース単体の評価は難しいが、NACSIS-CAT/ILL 関連研修体系全体では、学術文献相互利用サービスのスムーズな運用（日数の短縮や成功率）が評価目標となる。運用をどのように評価するかが課題。評価基準を定めた上で、本コースのカリキュラムに関連する内容を反映することが望ましい。	コース単体の評価は難しいが、NACSIS-CAT/ILL 関連研修体系全体では、総合目録データベースの品質向上が最終的な評価目標となる。データベースの品質をどのように評価するかが課題。評価基準を定めた上で、本コースのカリキュラムに関連する内容を反映することが望ましい。



3. 目録システム講習会（図書コース）到達度確認テスト（仮称）と実施案

3.1 テスト概要

講習受講後に、習得すべき内容を理解しているかを診断するテストである。各講のポイントを確認するテスト（客観方式）と登録作業を伴うテスト（実技方式）から成る。

各講のポイントを確認するテスト

- ・ 各講の終わりに（もしくは半日に1回の割合で）、その内容を理解できているかを確認するテスト
- ・ 設問数：各10題程度
- ・ 所要時間：各15分程度
- ・ 受講者はその場で自ら採点し、結果を確認することができる。
- ・ 解答方式：多肢択一、多肢複択

登録作業を伴うテスト

- ・ 講習会受講後、総合目録データベースの意味を理解して書誌登録（修正）ができるかを確認するテスト
- ・ 設問数：5～10題程度
- ・ 受講者は、答案（登録結果と作業経緯に関するアンケート）を提出し、採点を受ける。
- ・ 解答方式：記述式

3.2 実施方法

各講のポイントを確認するテストは、e-Learningシステムに搭載し、講習会場からインターネット経由で接続して実施する。登録作業を伴うテストについては今後詳細を検討するが、講習会用NACSIS-CATデータベースから書誌のテキストファイルをダウンロードし、修正後e-Learningシステムへアップロードする案が考えられている。

3.3 今後の検討課題

- ・ 登録作業を伴うテストの実施にかかる詳細手順
- ・ テストの評価方法の決定及び修了認定との連動関係
- ・ 再教育の方法
- ・ 課題作成、採点の体制

4. e-Learning プロトタイプ (到達度確認テスト[検索])

平成 17 年度に e-Learning プロトタイプとして、到達度確認テスト (仮称) を作成した。問題は次のとおりである。

次の各問いに答えなさい。(選択肢中の はスペースを表わす。)

Q 1 . 次の文章の空欄に補充する語の組み合わせとして正しいものはどれか。

総合目録データベースは【 (1) 】されているので、登録作業の【 (2) 】に検索を行う。

[テーマ：検索のタイミングを理解する(テキスト「1. 検索の目的」から)]

- A. (1)常に更新 (2)直後
- B. (1)常に維持 (2)前後
- C. (1)常に更新 (2)直前
- D. (1)常に検索 (2)前後

Q 2 . 所蔵登録をするためにある検索キーで書誌検索した結果、参照ファイルの書誌データが 1 件ヒットした。その場合に次にすべき最も適切なことは何か。

[テーマ：重複書誌を作らないための作業を理解する(テキスト「3. 検索の実際」から)]

- A. 書誌同定作業を行う。
- B. その書誌を流用し、総合目録データベースに新規に書誌を作成する。
- C. 総合目録データベースの入力基準に合致しない記述を修正する。
- D. 別の検索キーで再検索する。

Q 3 . 所蔵登録をするために ISBN で書誌検索した結果、ヒット 0 件だった。その場合に次にすべき最も適切なことは何か。

[テーマ：重複書誌を作らないための作業を理解する(テキスト「3. 検索の実際」から)]

- A. 総合目録データベースに書誌を新規作成し、所蔵登録をする。
- B. 参照ファイルを指定して ISBN で検索する。
- C. しばらく時間をおいてから ISBN で再度検索する。
- D. 別の検索キーで検索する。

Q 4 . 総合目録データベースを次の(a)～(d)の4つの条件でそれぞれ検索した場合、ヒット数が多いと考えられる順番は[A].～[D].のうちどれか。

[テーマ：検索キーの違いによる検索結果の違いを理解する(テキスト「3. 検索の実際」から)]

条件

- (a) TITLE=「世界の民族」
- (b) TITLE=「世界 民族」
- (c) TITLE=「せかい みんなぞく」
- (d) TITLE=「世界の民族*」

- A. (c)(b)(a)(d)
- B. (c)(b)(d)(a)
- C. (d)(b)(c)(a)
- D. (b)(c)(a)(d)

Q 5 . 検索画面のコードフィールド (ISBN, ID など項目名の後ろに「:」のつくフィールド) の特徴は次のうちどれか。

[テーマ: 検索キーとその特長を理解する (テキスト「7. 検索キー」から)]

- A. 数字でしか検索できない。
- B. 検索キーを一つしか入力することができない。
- C. 前方一致検索が可能である。
- D. 参照ファイルの検索ができる。

Q 6 . 検索画面のキーワードフィールド (TITLE, AUTH など項目名の後ろに「=」のつくフィールド) の特徴は次のうちどれか。

[テーマ: 検索キーとその特長を理解する (テキスト「7. 検索キー」から)]

- A. 数字とアルファベットでしか検索できない。
- B. 検索キーを一つしか入力することができない。
- C. 前方一致検索が可能である。
- D. 検索対象ファイルが指定できる。

Q 7 . 検索キーの自由度を説明したもののうち正しいものはどれか。すべて選択すること。

[テーマ: 検索キーの自由度を理解する (テキスト「7. 検索キー」から)]

- A. 漢字は新字体でも旧字体でもいい。
- B. EXC 文字は対応するローマ字でもよい。
- C. 記号の長音、ハイフン、マイナス記号等は入力しなくてもよい。
- D. かなは新かなづかいでも旧かなづかいでもよい。

Q 8 . TR に「国立情報学研究所とは / 情報太郎著」をもつ書誌データを検索することができる

検索キーはどれか。すべて選択すること。

[テーマ：検索方式と検索結果の違いを理解する(テキスト「7. 検索キー」から)]

- A. TITLE = 「国立」
- B. TITLE = 「情報学研究所」
- C. TITLE = 「情報学」
- D. TITLE = 「国立情報学研究*」
- E. AUTH = 「情報太郎」
- F. AUTH = 「太郎」

Q 9 . 「望月の子供達」という書名の書誌データを検索する際の正しい検索キーは次のうちどれか。

[テーマ：ヨミ・分かち書きと検索方式の関係を理解する(テキスト「8. 検索上の注意点」から)]

- A. TITLE=「モチズキ ノ コドモタチ」
- B. TITLE=「モチズキ ノ コドモ*」
- C. TITLE=「モチヅキ ノ コドモ*」

Q 1 0 . 検索上の注意点のうち正しいものはどれか。すべて選択すること。

[テーマ：検索上の注意点を理解する(テキスト「8. 検索上の注意点」から)]

- A. 階層を持つ書誌の場合、親書誌レコードと子書誌レコード双方のタイトルを使って検索すると効果的である。
- B. 書誌レコードには ISBN が記述されていなかったり、資料に記述された ISBN が誤っていることがある。
- C. 参照 MARC では、タイトル関連情報のヨミが入力されていないことがある。
- D. ヨミの分かち書きの単位にユレがあると漢字の単語単位の検索用インデクスにもユレが生じる。

5. 参考文献

1) 書誌ユーティリティ課題検討プロジェクト最終報告

http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/contents/ncat_info_kadaiPT-last-report.pdf

2) OCLC 関連参考 [accessed 2006-2-16]

- WorldCat 統計

<http://www.oclc.org/worldcat/grow.htm>

<http://www.oclc.org/worldcat/statistics/default.htm>

- OCLC Bibliographic Formats and Standards

<http://www.oclc.org/bibformats/default.htm>

- OCLC チュートリアルコース

<http://www.oclc.org/support/training/>

- Using OCLC Connexion Browser: An OCLC Tutorial

<http://www.oclc.org/support/training/catexpress/tutorial/>

- OCLC 地区代理店

<http://www.oclc.org/contacts/regional/>

3) コンピテンシー関連参考 [accessed 2006-3-22]

- Competency for information professionals of the 21th century. revised ed. 2003

<http://www.sla.org/content/learn/comp2003/index.cfm>

- Shaping the future: ASERL's competencies for research librarians

<http://www.aserl.org/statements/competencies/competencies.htm>